

会 議 録					
行 田 市 教 育 委 員 会 令 和 6 年 第 1 1 回 1 0 月 定 例 会					
招集年月日	令和6年10月17日（木）		開会場所	行田市産業文化会館管理棟 2 A会議室	
開閉の時刻 及び宣言者	開会 1 0 月 1 7 日（木） 午後 2 時 0 0 分			教育長 渡 辺 充	
	閉会 1 0 月 1 7 日（木） 午後 2 時 3 2 分			教育長 渡 辺 充	
教育長	渡 辺 充	教育長職務代理者	鹿 山 高 彦	仮議長	
席次番号	出席の教育長 及び委員氏名	摘 要			
1	渡 辺 充				
2	鹿 山 高 彦				
3	大 竹 洋 平				
4	大 木 華 子				
5	田 口 路 子				
議 事 参 与 者			書 記		
学校教育部長		細谷 博之	書 記 長 岡部 将弘 書 記 次 長 上野恵美子 書 記 萩原 宏幸		
学校教育部参事		中島 淳			
生涯学習部長		中村 和則			
学校教育部次長					
兼教育指導課長		石崎 昌稔			
生涯学習部次長兼図書館長					
兼視聴覚ライブラリー館長		松田 正			
教育総務課長		岡部 将弘			
学校給食センター所長		飯田 勝雄			
生涯学習課長		近藤 隆洋			
スポーツ振興課長		野口 啓司			
文化財保護課長		酒井 春彦			
教育文化センター所長					
兼中央公民館長		新井 大			
郷土博物館長		鈴木紀三雄			
学校教育部副参事		大野 三佳			
教育支援センター所長		篠田 豊和			

会議事件名		顛	末
会 議 の 進 行 状 況	報告第4号 全国学力・学習状況調査及び 埼玉県学力・学習状況調査の 結果について	教育長 会議の公開について諮る前に、傍聴人の確認を事務局に願 いする。	
		教育総務課長 本日、傍聴人は0名である。	
		教育長 本日の会議日程は報告1件である。非公開とすべき案件はな いので、すべて公開としてよろしいか。	
		【全委員承認】	
		教育長 日程に先立ち、9月定例会の会議録について事務局に報告を 求める。	
		書記次長 9月定例会会議録報告	
		教育長 何か意見等はあるか。	
		【全委員承認】	
		教育長提案、書記次長議案朗読	
		教育指導課長 まず、全国学力学習状況調査について、令和6年4月18日 に、小学校第6学年と中学校第3学年がそれぞれ、国語、算数・ 数学の2教科で質問紙調査に取り組む形で実施された。 表の数字は正答率のパーセンテージをそれぞれ表している。 小学校第6学年では、国語の正答率は全国が67.7%に対	

		し行田市は65.0%で、その差がマイナス2.7ポイントである。算数の正答率は全国が63.4%に対し、行田市は59.0%、で、その差はマイナス4.4ポイントである。合計するとその差はマイナス7.1ポイントで、昨年はマイナス4.4ポイントなので、全国との差が開いた結果となった。 学習指導要領の内容を見ると、国語では、「知識および技能」において、「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」、また、「思考力、判断力、表現力等」では、「A 話すこと・聞くこと」の差が大きく、文法に対する理解について課題が見られる。また、話し手の目的や意図、聞き手の求めていることに応じて話す際の材料を集めたり、分類したり、関係付けたりして伝え合う内容を検討することに課題が見られる。文法については、文章を読む際に、主語となる語句に注目できるような問いを設定することや、高学年においても適宜復習し、理解の定着を図ることが必要である。話すこと聞くことを伸ばすためには、目的や意義等を児童に理解させるとともに、実際に伝え合う活動や振り返りを充実させることが必要と考える。 続いて算数では基本的な計算の技能に課題が見られる他、記述式の問題、解法に関する複数の考え方を基に答える問題などで苦手な様子がうかがえる。適用問題の時間を明確に設定し、A I ドリル等も活用しながら、児童一人一人の課題に応じた問題に取り組ませること、日頃の授業において他者の考えを理解する力の育成が重要となる。日頃の授業の中で自他の考えの違いに気づかせたり、他者の考え方を説明させたりといった場面を意図的に設定することや、協働的な学び、I C T活用の視点を大切にした授業改善が必要と捉えている。 中学校第3学年では、国語の正答率は全国が58.1%に対し行田市は55.0%で、その差がマイナス3.1ポイントである。数学の正答率は全国が52.5%に対し、行田市は47.0%、で、その差はマイナス5.5ポイントである。合計するとその差はマイナス8.6ポイントで、昨年はマイナス2.8ポイントなので、全国との差が小学校と同様に開いた結果となった。 学習指導要領の内容を見ると、国語では、「知識および技能」において、「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2) 情報の扱い方に関する事項」、また、「思考力、判断力、表現力等」「A 話すこと・聞くこと」の差が大きく、「修飾語」の役割に対する理解が不十分であるなど、文法に対する理解について課題が見
--	--	---

		られる。また、複数の発言がどのような資料を根拠とした発言なのかを読み取ることに課題が見られた。文法の単元は時数も短いため、他の単元でも適宜扱い、復習することが必要である。また、「話す・聞く」の学習の中で資料を読み取ったり、根拠を明確にして発表したりする経験を積ませる必要がある。小学校においても同様の課題が見られるため、小中学校の系統性を意識した授業づくりも大切となる。物語や説明文を読み取ったり、自分の考えを記述したりする部分は比較的全国平均に近い正答率になっているため、「話す・聞く」、「文法」の単元の授業改善に取り組んでいきたい。 次に数学では、記述式の問題の無回答率が高く、考え方や理解を記述することを苦手と感じている生徒が多いと考えられる。協働的な学びを促し、生徒が自身の考えを伝えたり、他者からの意見をもとに考えを深めたりする授業展開の工夫が必要である。 次のページでは質問紙に関する調査の一部抜粋について、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」など、肯定的評価の割合のパーセンテージを表している。 小学校、中学校どちらも同じような傾向となり、例えば「1 自分には良いところがあると思う」、「3 将来の夢や目標を持っている」といった、非認知的能力やキャリアに関する質問について、肯定的な回答が多くなっている。また、「2 先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」といった機会が多いことなどが、これらの結果に繋がっていると考えられる。 「4 自分と違う意見について考えるのは楽しいと思う」の項目において、肯定的な回答がやや少ないこと、また、質問9、10の授業でタブレットなどのICT機器の活用頻度を問う質問が低い値となっている。授業者がICTを使用するだけでなく、児童生徒が使用することや、家庭学習にもICTを活用することが重要であると捉えている。 次に埼玉県学力学習状況調査の結果について説明する。 小学校は令和6年5月7、9、10日に第4学年から第6学年まで、また中学校は5月14、16、17日に第1学年から第3学年まで実施した。 小学生は国語と算数の2教科、中学生は第1学年が国語と数学の2教科、第2、第3学年は英語を加えた3教科で、加えて全ての学年で質問紙調査を、それぞれC B T、タブレット端末を
--	--	---

		使った回答で実施した。 小学校では、どの学年のどの教科においても、県平均を下回る約2から5ポイントの差をつけられている。特に、合計2教科の合計を見ると、学年が上がるにつれて差も大きくなっていることが分かる。 中学校では、県平均を上回ったのは2学年の国語のみで、その他の教科は約1.5ポイントから7ポイントの差となり、特に中学校3年生では大きな差をつけられている。 次のページでは質問紙調査の一部抜粋について、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」といった肯定的回答の割合についてパーセンテージを表している。 先ほどの全国学力学習状況調査のアンケート結果の傾向と同様に「2 自分には、よいところがあると思う」、「4 将来の夢や目標をもっている」、「6 学校の先生たちは自分の良いところを認めてくれた」などは大変高い値を示した。 また、課題となるところが、授業でのタブレットの活用頻度や、タブレットの持ち帰り頻度が低い値となっていることである。児童生徒自らがICTを使用することや家庭学習にもICTを活用することなどが重要であることが改めて分かった。 これらの結果を踏まえ、一つ一つ課題を解決し、真の学力向上を果たすために、様々な施策を検討し、各学校と一丸となって、学力向上を推進していく。 大木委員 全国学力学習状況調査や埼玉県学力学習状況調査のポイントの差について前回よりも開いているということだが、コロナ禍やタブレット端末の導入などの影響もあり単純に比較できない部分もあるが、それより以前の結果はどうなっているか。 教育指導課長 令和4年度及び令和3年度については、いずれも全国平均を上回っていない。 大木委員 学校のタブレット端末について、破損防止の観点から格納庫に保管している学校や、収納用バックにタブレット端末を入れ
--	--	---

	て机の横に提げている学校がある。どちらかといえば隣にある方が活用しやすい印象があるが、タブレットの保管場所については学校の方針によって異なるのか。 教育指導課長 導入当初は予備機があまりなかったため、破損防止の観点から保管庫で充電及び保管し持ち帰りについても推奨してなかった。しかしながら、現在は利用促進のため持ち帰りを推奨している。 鹿山委員 令和6年度全国学力学習状況調査で、小学校、中学校ともに「データの活用」の項目が全国平均を下回っているが、この「データの活用」はどのような問題になっているのか。 教育指導課長 ある資料より数字を取り出し、それを使って問題を解くものである。データを読み取れるか、それを活用できるかというところがポイントになる。 鹿山委員 それは普段の学校の授業の中でも行っているのか。 教育指導課長 応用的な問題が教科書にもいくつか載っている。全国的にも資料やデータを総合的に活用する問題が増えている。ただ、問題に慣れることも必要なため、教科書問題だけでなく過去問等を解きトレーニングすることも必要だと考える。 鹿山委員 普段からそういった問題も、教科書だけではなく、どんどん取り組んでいただきたいと考える。 埼玉県は学力調査はパソコンを使ったものになったと思ったが、去年は紙での調査だったのか。 教育指導課長
--	---

	昨年は紙かＣＢＴか選択でき、本市は紙での調査を選択した。本年はすべてＣＢＴでの調査となった。 鹿山委員 タブレット操作に不慣れなことが原因の一因とのことだが、もし今回の調査がタブレット端末でなく紙だったら良い成績だったと考えるか。 教育指導課長 その可能性もあったかもしれないが、本市の課題として受け止め、学校における児童生徒のタブレット端末の使用頻度を上げていく。 大竹委員 市内の各学校で成績に差はあるのか。 教育指導課長 学校間による差はある。 大竹委員 原因がわからないと改善につながらないと思うが、何が原因だと考えるか。 教育指導課長 学校ごとに課題が異なるため、その課題解決に向けた様々な工夫、対策を指導している。 さらに、学力向上のための学校長面談も行っており、原因を究明し、課題解決のための施策についてヒアリングを実施しており、少しでもよい形で次年度に繋げていきたいと考える。 大竹委員 学校長だけでなく、各先生方の意識も変わらないと子どもたちに伝わらないと考えるので、先生方にも意識改革に向けた取り組みを行っていただきたい。 教育指導課長 各学校で課題を共有しなければ、何に取り組んでいいのかわ
--	--

		からないので、現状と課題を明確にし、課題解決のためどういった授業を行っていくかなど、学力向上のため特に力を入れるポイント等について周知を図っていく。 鹿山委員 学校間の格差があるとのことだが、今後義務教育学校３校になることによって格差はなくなっていくか。 教育指導課長 色々な子どもがいることにより競争心も生まれるし、そういった面がプラスになると考えている。 大竹委員 学力の差はボキャブラリーの差であると言われている。読書が有効であるので、読書の習慣づけをぜひ学校で取り入れてもらいたい。 教育指導課長 読書にも力を入れており、読書活動推進教員を各学校に配置する等、様々な取組を行っている。 教育長 以上で本日の定例会を閉会とする。
--	--	--

そ の 他 特 に 重 要 と 認 め る 事 項

- 1 次回定例会開催予定日 令和6年11月13日（水） 午後2時00分
行田市産業文化会館管理棟 2A会議室

以上、顛末を記載して、その発言内容に相違がないことを証するため、ここに署名する。

教 育 長

委 員

委 員